

新刊紹介

エドワーズ著 宗教哲學概論 上野隆誠譯

本書はマイアル、エドワーズの著フキロフナー、オア、レリザオンを翻譯して宗教哲學概論と銘じたものである。哲學者著叢書第十四編に納むる處にて、約三百五十頁の冊子として誠によく出来てゐるといへる。其の取扱はんとする處は、宗教の哲學的考察を下さんとするもので、前提として宗教を心理的に分析し且つ古今の宗教的事實を捕へ、幾多の學說にあてはめて検討して行くものである。來るべき新らしき宗教哲學を教ふる道程として、夫れに横はれる宗教諸問題を吟味するものである。宗教哲學の領域を克明に論じ盡さうとする企ては元よりかゝる小冊子に於ては不可能な事と思はるゝが之を概括的に網羅してゐといふ點に於て充分であらう。

本書の内容は先づ宗教哲學の範圍と問題を掲げ、宗教が古代より全人類の經驗に顯はれたるものであつて、其の性質、機能、價值、眞理、妥當性を哲學的に研究するを以て目的とする。之に依つて宗教經驗の現象研究より始むべきであるとなして、人類學上より見たる宗教の起源に筆を起し、古代よりの啓示說、生氣說、靈魂說より呪術の類をはじめ野蠻人の宗教研究をなすならば、現代文明人のもてる宗教が彼の此に昇華されたる事を知るものとして文化過程を説明してゐる。次で、人間の内的生命の何處に宗教の源泉があるかといふ問に答へて、宗教を心理的に起源を求め、

本能、情緒、慾望等を積極的に、又消極的に吟味しゆき團體生活即ち社會現象の一なりとする一派の說にも及んでゐる。更に宗教の發達を歴史的に見れば、部族より國民宗教へ、そして普遍的宗教へと分類法に従ひて、東西各種の宗教の神々の名を擧げてその形式や儀禮態度等を述べてゐる。

以上此等前半に於て宗教經驗の現象を丁寧に取り扱ひて夫れにより後段には、然らば宗教とは如何なるものなるかといふ定義を始めとし、その根本的性質並に非宗教的なものとの區別を立て、人が爲め、宗教的事實や分析分類を題材として其處に統一したる意義を見分けん事を求むるのである。依つて、先づ道德と或は藝術や科學、哲學との關係につき論說して宗教の位置を確立せんとしてゐるのである。次には宇宙は宗教的意識が假定する様な性質のものかと問ふて眞理を把握するに宗教と知識との交際より述べ、宗教が全組織に於て樞要の地位を充すといふ過程を説いてゐる。更に根本實在として宗教は眞實なりや、客觀的に宗教的世界觀が存立するやとの疑問より、自然主義や唯物論を論じ新心理學の説明が靈魂世界への挑戦を述べ、惡の問題などを數へてゐる。最後の章には神と絶對と題して、絶對的善なるものは罪も惡も存在せざる處、世界をあるがまゝに認容しなければならぬ。かゝる絶對を神とすべきか。若し宇宙を崇拜して此を宗教の對象とするならば、絶對の形をかへて宇宙外の何ものかにしたものである。神とは吾々が生動する全實在の無窮の創造的源泉であり、世界に内在せる

もの、永久不變の實在である。宇宙過程と人間進歩の究竟的目的となれる凡ての價值理想の源泉である。と、神の絶對性と實在性と共に及んで筆を止めてゐる。

以上の内容は諸種の學說を批判的に序列し、著者自らは批判的組織法といつてゐるが、まだくゞ残された問題も多いであらうし、論述すべき點も少くないのである。引用する學說多きに比して、宗教哲學的に解説したるものと比べて、宗教哲學を組織し得たとは感ぜられないのである。然し、譯文の文致は平易によく整ひ、加ふるに細かく索引を附備してある。蓋し宗教哲學の概説としては格好のものといへやう。

(紹介者 阿部現亮) (理想社出版部)

フツセルの現象學

高橋里美著

現代の哲學界の寵兒とも言ふべき現象學の創始者フツセルの現象學を簡明に手きはよく、然も要點を巧に捉へて紹介せんと企てられたのが本書の目的である。

著者は現象學について深く研鑽を積まれた學者であるのみならず、一九二六年の秋から翌年の夏へかけてフライブルク大學で親しくフツセル教授の下で講義を聴かれた。それらの遺語に加ふるにその後のフツセルの論文や著述を參考して非常に廣汎な研究から、フツセルの現象學について凡そ四篇の論文にまとめてある。

第一の「フツセルの現象學、特に其の現象學的還元について」は本書の中で最も主たるものであり、最も組織的な論述であつてフツセルの現象學を紹介したものである。特に現象學的還元を主

なる觀點としてあり、フツセルの現象學全般の紹介を試みたものでないが力作であるから、讀者の參考となることが多いであらう。第二の「批判論と現象學」第三の「分析と綜合」は第一と相補足すべきものであり、第四に「フツセルの事」と題するのは印象記である。終に附けてある註は讀者をして、更に深き研究に導く暗示力に富んでゐる。

各論文がもと雜誌に掲げられたのを、本書の爲に集められたので、本書全體として、組織的な記述とは言へないが、初學者に現象學を正しく理解せしめる上に益する所が大であらう。終に臨んで將來フツセルの現象學に付き、高橋教授が組織的な著作を發表せられんことを切望する。(紹介者 高橋俊乘)

引得 第一號 說苑引得

古來東洋の圖書には索引(引得)の編纂されてゐない爲、後進の者をして如何ばかり不便を感ぜしめたか分らぬ。最近になつて新進の學者にして古典の名著に索引を編纂する人々の現れたのは慶賀すべきことである。本書もその一であつて、燕京大學の圖書館で洪業氏を主任として編纂されたものである。

由來漢字は歐洲語や國語の假名と違つて、排列が頗る困難である。恐らく完全な排列は出来ないかも知れない。本書は皮擲の法と稱し、言はゞ字形と筆順とによつて、歐洲語の字母順の如く、一の漢字を多くの部位に區分し、その區分に一定の順位を設け、一種のアルファベチーションを考案して、前漢詞向の著「說苑」の要語を排列し、四部叢刊本の丁數づけによつて索引を編修した